

「雑行雑修自力の心をふりすてて」と領解文にあるが、皆さん振り捨てましたか。雑行雑修がどんな物柄やら、自力の心や疑いがどんな品物やら知らないで、振り捨てた積りでいては真の解決はつきませんよ。

雑行雑修と言えば、神社に参って祈り祈祷をしたり、占いやまじないをしたり、お水を貰ったりする事のように思っているが、そんな事は仏教の仲間でないのだから雑行雑修の仲間に入っていないのだ。

信前の人は悉く雑行雑修を行い、毎日毎日自力の心を動かしているのだ。何故かと

言えば、一声称えても自力の心から出て来る称名は自力の念仏であり、百千万遍称えても他力の信から流れて来る称名なら他力の念仏なのだ。数の多少にはよらない、心の如何による

のだ。しかし同行が自分は自力の心は捨てたっていると思つて自惚れているのだから始末が悪
い。信前信後の水際を鮮やかに聞き、信楽開発する以前はどんなに有難がついていても慶んで
いても、悉く自力の機執は去っていないのだ。だから雑行雑修も消えていないのだ。雑行
と言ひ雑修というも、名前は悪いけれども、物柄は上等なのだ。心が他力になつていないか
ら、自力廻向の機執が去らないから、雑行雑修と名前を付けて嫌わるるのだ。

雑行とは、善導様が浄土の業でない諸善万行を貶して雑行と言われたのであつて、御和讃
には

こころは一つにあらねども
雑行雑修これにたり

浄土の行にあらぬをば
ひとへに雑行となづけたり

の如く、三世の諸仏の浄土に通用する善根、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧、孝養父

母、起立塔像、散華焼香、飯食沙門、公益公德等々は、修すれば必ず善果を開く。これを
観經には、定散二善三福九品と教えられ、第十九願には修諸功德と誓われてあるが、修しな
ければならない善根ではあるけれども、自力の機執の根本が截たれてなければ、必ずこれだ
け修したからあの人よりはと人間に比較して自惚れ、往因に擬するから、絶対の境地から
雜行を排斥するのだ。物柄は上等でも機執が掛かっているから振り捨てさすのであって、捨
てよ、捨ててはならない。機執は捨てよ、物柄捨てたら大事なのだ、その気持ちは開發しな
ければはつきり判らない。

雜修とは、同じく善導様の礼讃に出ているのであるが、元は雜行を修するを雜修と名づけ
たのであったが、今は助正ならべて修するを雜修と名づけ、御和讃に

助正ならべて修するをば

すなわち雜修となづけたり

一心をえざる人なれば

仏恩報ずる心なし

仏号むねと修すれども

現世を祈る行者をば

これも雑修となづけてぞ

千中無一ときらわるる

と。助正とは、阿弥陀様に向いた五正行の中で、第四の称名は正定の業であり、前三後一の善根は助業であるが、これが信心正因称名報恩の正定業に引き立てられて、任運随伴する助業なれば、尊い報謝行であるけれども、開発しない以前は自惚れが先に立つから、お経も読める、観念も礼拝も出来る、讃嘆供養もあの人よりは立派に出来るから悪い処には行かないだろう、南無阿弥陀仏と往生の資助に勤めているから、雑修と嫌われるのであって、物柄は阿弥陀様に向いている正行であるけれども、これだけ出来るから、あの人よりは勤まるからと比較して自惚れる処に、自力の執着が残っているから捨てなければならぬが、修

しなければならぬ物柄なのだ。心一つが水際鮮やかに開発すれば、立派に生かして使うことができるのだ。

自力の心とは、清い心が出た時には往生間違いない気がするけれども、乱れた時には不安の機が出る。善根した時には行けそうな思いがするけれども、悪い心が出た時には助かりそうにない。こんな心が出るようでは、まだまだ救われていないに違いない。今度の一席で、この一席で解決つけて戴かなければならないと真剣に進む姿が自力の心の顕れである。その奮発心は無くしては進まれないが、判るだろうと言う機執は捨てなければならぬのだ。

疑いの心とは、私は疑っていないと言うような粗雑な疑いを、真宗では言っていない。極めて微細な、本願に向き、往生に向き、お助けに向き、勅命に向いて、これでよいか、ひよつと堕ちさせぬか、どうも、ああは仰るけれどもと、自分の機に曇りがあり、不安が残る、心配が顕れ、危ぶみが出て来たのが、悉く疑いだから、お助けを死後に眺め、ぼんやり

聞きいている人ひとにはこんな不安ふあんや心配しんぱいは出でて来こないけれども、少すこし念ねんを入いれた人ひとには必かならずあるのだ。しかしそれは煩惱ぼんのうだから往生おうじようの邪魔じゃまにならないと誤魔化ごまかしているが、豈計あにはからんや、それが往生おうじように對する疑うたがいの親玉おやだまだから晴はれなければ真実しんじつの報土ほうどに往生おうじようは出来できないのだ。

もう一度念いちどねんを入いれて考かんがえて見れば、雜行ぞうぎようとは名前なまえは悪わるいけれども物柄ものがらは上等じようとうだが、振ふり捨すててしまえば、布施ふせ、持戒じかい、乃至孝養父母ないしこうようふぼなど捨すててしまえ、実行じっこうするなと言う事ことになるがよいか。又、雜修ざっしゆとは蛇蝎だかつのような名前なまえであるけれども、物柄ものがらは阿弥陀様あみださまに向むいた五種ごしゆの正行ぎようであるが、お掃除そうじもお給仕きゆうじも振ふり捨すててよいか。自力じりきの心こころとは、難信なんしんの法ほうでも聞きき拔ぬかなければならぬと言う奮発心ふんぱつしんだが、捨すててしまつてよいか。そんな善根ぜんこんを振ふり捨すててしまえば善根功德ぜんこんくどくは積つむな、御仏前おぶつぜんには見向みむきもするな、何時いつか安心あんしんできるだろう、という放縱無慚ほうじゆうむざんな怠なまけ者ものをつくしゅうしになるがよいか。

それは言葉ことばを通して真意しんいを獲えなければならぬ。この領解文りようげもんの立場たちばは、信心しんじん獲得ぎやくとく以後いごの

安心、報謝、師徳、法度を顕されたものであつて、安心の極意、絶対の境地は一分一厘善根功德に用事がなく、南無阿弥陀仏に満足し切つて、報謝、師徳、法度に流れ出るのであるけれども、一般の人が捨ててもいないのに、鵜呑みして捨てた真似をしていたのでは、上人様のお領解を覚えただけになつて、自分の解決にはならないぞ。

大体お言葉の上から伺えば、従仮入真を顕し、絶対の境地に立てば自然の発露として報謝、師徳、法度は流出する事を顕されてあるのである。

八万の法蔵を、観無量寿経の観に納め、定散二善三福九品と開陳してあるけれども、詮じつむれば第十九願の修諸功德であり、廃観立称した処が諸善万行を捨て、六字の名号を立てしめたので雑行を捨てよに当たり、その名号の執持の仕方を阿弥陀経に 不可以少善根福德因縁と貶して、執持名号若一日乃至七日一心不乱と教えて第二十願の植諸徳本に還して、他力他力と教えているけれども、他の正行を以て往生の資助をさすから雑修と払い、

名号みようごうの独り働ひとばたらきと言いいつつも、定散じようさんの機執きしゆうが去さらないから、自力じりきの心こころを振ふり捨すててと示しめされ
たのであつて、法ほうも自力じりき、機きも自力じりきの觀經かんぎようより、法ほうは他力たうりきで機きは自力じりきの小經しょうきように移うつらし、更に
法ほうも他力たうりき、機きも他力たうりきの大經だいきように転てんぜしめられたのが、雜行ぞうぎよう雜修ざしゆ自力じりきの心こころを振ふり捨すてよと仰おほせ
られたのである。

同行衆どうぎようしゆうには難解なんかいであつたから、実地じつちに當あてて指導しどうすれば、身口意しんくいの三業さんごうを慎つつしむと言うの
は消極しょうきよく的な善根ぜんこんであり、更に進すすんで積極せつきよく的に、一身上いっしんじようより家庭かて的に社会しゃかい的に国家こっか的に尽つくす
べき善根ぜんこんは山やまほどあるのだから、諸善万行しよぜんまんぎようを行おこなわなければ善果ぜんかを招まねく事ことが出来できない。又また、行
わなければ社会しゃかいが通とおれない、何故なぜそれを雜行ぞうぎようと嫌きらい、捨すてよと教おしえたかと言いえば、絶對他力ぜったいたうりき
の報土ほうどに持もち込こめば、各自かくじの善根ぜんこんの程度ていどが違ちがうから結果けつかが違ちがう。善根ぜんこん自体じたいは立派りっぱであるけれ
ども機執きしゆうが掛かかっているから、毒どくが雜まざっているから純他力じゆんたうりきにならない。往生おうじようの助たすけにしな
い善根ぜんこんならウンとせよ、浄土じようどに持もち運はこべば雜行ぞうぎようぞと教おしえて正行しょうぎように歸きせしむる為ためである。

定散二善三福九品に眼を注いでいた人達が、不可以少善根福德因縁と切り墮とされて、

ほう じりき す たぜんこんたふくとく みようごう き たりき よろこ しんしゅうどうぎよう

法の自力を捨て多善根多福德の名号に帰して、他力じゃ くと慶んでいるので、真宗の同行

の九分九厘はここに留まっているのである。五兆の願行を六字の名号に打ち込み、正覚を

成就し給うてから十劫已来立ち続けておらるるから疑う余地はないではないか。はいの返事

む ほう どこ たりき ごんほうしゃ なら た い

も向こうからと、法は何処までも他力であるけれども、これも御恩報謝 くと並べ立て行

く処に淋しい機を賑やかに飾り立てて往生しようとする、五種の正行の出来ないときよりも

出来た時の方が、参れそうな気持のするのが雑修と嫌われるのであつて、五種の正行は立派

ほうしゃ なまえ かく ふ だい くせ す ため ざっしゆ す

であるけれども、ご報謝 くの名前に隠れて踏み台にする癖を捨てしめる為に雑修を捨てよ

と払はらわれたのである。

じりじり調熟ちようじゆくこうみようの光明そだで育て上げられ、柿かきが熟柿じゆくしに成なるように、何時いつとはなしにここまで育てられ、御法義ごほうぎの筋道すじみちも判りわか、有難ありがたうなれば直ただちに自惚うぬぼれて、信後しんごの真似まねをして御恩報謝ごおんほうしゃと出でかけるが、まだ早はやい!!

今いままでは居眠りいねむ半分はんぶん、菓子かしを啣くわえていても聞きけたのだ。これからが一人凌ひとりしのぎ、大千世界だいせんせかいに満みてらん火ひをも過すぎゆきて、身命しんめいを賭として聞きこうと言いう真剣しんけんになるのだ。御仏様みほとけさまは正覚しょうがくを成就じようじゆしたまいて十劫じっこう已来いらい天井てんじように輝かがやいておわしますけれども、機中きちゆうに印現いんげんしていないではないか。法ほうを仰あおげよ、機きを見みれば千年せんねん経たっても戴いたけないぞといいっているのが、法ほうは他力たうりきで機きの自力じりきの残のこっている証拠しょうこではないか。二十年ねんき間きいても三十年ねんいた戴いたいても底そこきびの悪いわる、地獄じごくと聞きいても驚おどろかず、極楽ごくらくと聞きいても喜よろこばない代物しろものが闍提せんだいの機きではないか。この一席いっせきでこの一席いっせきでと真剣しんけんにあせればあせる程動ほどうごかん機魂きだまは何処どこで救すくわれるのだ。何なんとか成なれそうなものうぬぼと自惚うぬぼ

れているのが自力の心ではないか。なれる柄でないから、振り捨てよと教えられたのだ。

同行衆、何が残る。善根も間に合わぬ。五正行も役に立たぬ、奮発心も用事はないとす

れば、何が残る。煩惱熾盛、唯知作悪、無間のどん底から生え抜きの悪性、身動きならぬ絶対

の悪より他に残らないではないか。その機は釈尊も難化の三機、難治の三病で済度が出来な

いと捨てられ、第十八願から唯除五逆誹謗正法と除かれてあるが、今現に自分が除かれて

あると自覚しないから、攝取された若不生者の鮮やかな切れ味が諦得出来ないのだ。その

境地を「三定死」とも、「何れの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定住家ぞか

し」とも仰せられたのだが、一人凌ぎと言いながら聖人様にさして置いて、自分は他力で、

居眠り半分で済んだ積りでいるのだもの、それは他力でなくてやりっ放しだ。真剣に求めさ

されたとき、聞き得ぬ悪性に驚いて自力の機執は切り墮とされ往生の望みの絶えた時が「も

ろもろの雑行雑修自力の心をふりすてて」であり、誓願不思議に攝取された時が「一心に

阿弥陀如来」であり、仏智満入、正定不退、撰取不捨、一切の無明は晴れ、一切の志願は

満足せしめられ「この上の称名は御恩報謝と存じ、よろこび申し候」が報謝であり、「この

おんことわり聴聞申しわけ候こと」の信因称報の正教が師徳であり、「この上は定めおか

とう はつと

うえ

しんけつじよう うえ

ほうに じねん りゆう

せらるる」等が法度であるが、この上く とあるのは信決定の上からは、法爾自然に流

出せずにはいないのだ。自力の機執や疑いが有っても判らない素直な善人には、晴れたも

暮れたも判らないのが当たり前だ。角目を聞け、水際を聞けと言いながら、実地に通らない

人は、凡夫には判るものではない、仏仕事だからと逃げるのだ。自分の心しか言えないのだ

から、批難攻撃をしあえば、何れも正法を謗る大罪を侵しているのだ。はつきりせぬ人がお

れば、はつきりした人もいるのだ。「すでに信心決定せしめたる人もあるべし、また未安心

のともがあるべし、もってのほかの大事なり」で、お互いに念を入れて仏法は聴聞しな

ければならない。

さて本筋に立ち返って、雑行雑修自力の心を振り捨てて、必墮無間の丸裸体のまま、往生の望みの絶えた時、「我能く汝を護らん」の声なき声に至心信樂己を忘れて踊り上がり、無条件とはこの儘か、絶対他力とはこの儘か、成れん成れんで仏様を恨み、聞こえん聞こえんと聖人様を呪うていた悪魔の、火を噴き上げているこの儘が唯であったのか。ああよくも大地が破れなかった、よくも口が裂けなかった。「ああ」の言葉の出ない先に一切の無明は晴れ亘り、十方法界の功德を唯で戴いた廣大難思の慶心、唯という言葉までもいらない唯であったとは。

願力無窮にましませば

罪業深重も重からず

仏智無辺にましませば

散乱放逸も捨てられず

仏凡^{ぶつぼん}一体^{いつたい}、機法^{きほう}一体^{いつたい}、本願^{ほんがん}や行者^{ぎやうじゃ}・行者^{ぎやうじゃ}や本願^{ほんがん}、われは如来^{にょらい}の一人子^{ひとりこ}なり。底^{そこ}抜けの煩惱^{ぼんのう}

が功德^{くどくだい}大宝海^{ほうかい}とは。機相^{きそう}から言^いえば有漏^{うろ}の凡夫^{ぼんぶ}、法德^{ほうとく}から言^いえば正定聚^{しやうじやうしゆ}の菩薩^{ぼさつ}、往生^{おうじやう}の一段^{いちだん}

に自力^{じりき}の運び^{はこ}が微塵^{みじん}いささかも間^まに合^あわなかつたのだ。かかる広^{こう}大^{だい}な恩德^{おんとく}を身^みに受^うけながら

じつとしておらるるものかい。仮令^{たとい}八方^{はう}から攻^{こう}撃^{げき}を蒙^{こう}ろうとも、仮令^{たとい}身^みは八^やつ裂^ぎきに逢^あおう

とも、死^しに行^いく人^{ひと}達^{たち}の批難^{ひなん}攻^{こう}撃^{げき}位^{くらい}でびくつかれるものかい。死^しなぬ仏^{ほとけ}に逢^あうたが証^{しょう}拠^こだ。

一切^{いっさい}の苦惱^{くのう}が除^{のぞ}かれて自由^{じゆう}の天地^{てんち}を獲^えたことが証^{しょう}拠^こだ。多^おくの同^{どう}行^{ぎやう}は難^{なん}中^{ちゆう}の難^{なん}の峠^{とうげ}を越^こさず

に、上人^{しょうにん}様^{さま}のお言^{こと}葉^ばの真^ま似^ねして「あ^こら心^{こころ}得^え易^{やす}の安^{あん}心^{じん}や」と鼻歌^{はなうた}歌^{うた}つて流^る転^{てん}してゐるのではな

いか。未^み覚^{かく}を覚^さますのが我^{われ}等^らの使^し命^{めい}、世^せ間^{けん}を開^{かい}導^{どう}するが我^{われ}等^らの任^{にん}務^む、救^{すく}われ^た嬉^{うれ}しさには、

身^みを粉^こにしても報^{ほう}ずべし、骨^{ほね}を碎^{くだ}いても謝^{しゃ}すべし。教^{きやう}界^{かい}の第^{だい}一^{いつ}線^{せん}に立^たち身^{しん}命^{めい}を賭^として群^{ぐん}萌^{もう}を

拓^{ひら}き、邪^{じゃ}網^{もう}を断^{だん}除^{じよ}しなければならぬ、という勇^{ゆう}猛^{もう}心^{しん}が興^{おこ}り、身^みも心^{こころ}も南^な無^む阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}、拜^{おが}む

手^ても称^{とな}える口^{くち}も思^{おも}う心^{こころ}も南^な無^む阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}なりと、仏^{ぶつ}智^ちの不^ふ思^し議^ぎが噴^ふき出^でて来^くるのだから

無慚無愧のこの身にて

まことの心はなけれども

弥陀の廻向のみ名なれば

功德は十方に満ちたまふ

で、法体の大行が流出する処には、前三後一の助業は自然に随伴して、読めないながらも読

まずにおられないのが読誦正行。

乱れる中にも花を見るにつけ水を眺めるにつけ、浄

土の清浄を想像する時が觀察正行。恭敬尊敬、自然に頭の下がるのが礼拝正行。春夏秋

冬着物を着替えているのに、御戸帳や御打敷は汚れておらないか、床の花は生き生きとして

いるのに御花瓶の花は枯れてはならないぞ、が讃嘆供養正行。お愧かしうございます、

こうだい おんとか こうむ

ぶ いちりんむく

こと あき

た

むち

広大な恩徳を蒙りながら一分一厘報うていない事に呆れて、まだ足りないく と鞭をあて

ずにはおられないのだ。信前では雑修と嫌われていた行動が、開発以後では同類の助業とし

て仏事を莊嚴しているのだ。

果てしなきご恩、究みなき御恵みに生かされて、現生に十種の益を蒙る嬉しさには公益公

徳社会救済に乗り出すのが布施であり、言行一致身業説法をして教化するのが持戒であ

り、堅忍不拔堅忍持久、艱苦に堪え得るのが忍辱であり、奮闘努力産業興起しますます

進展せしむるのが精進であり、内省修養は禅定智慧である。精神的大満足を獲、三世を

貫く仏恩に感泣した上からは、親を拝み子を拝み夫婦相和し、兄弟の友愛自ら溢るる儘が家

庭の浄化ではないか。朋友相信じ、博愛を衆に及ぼす有様が、養老院や救済事業、盲啞学

校、社会事業等々との同情の発露が社会を浄化して行くのではないか。その儘が諸善万行

を励んでいる相ではないか。それが社会の一員として尽くすべき道であり、真宗教徒とし

ての俗諦の行儀ではないか。